

劇症型溶血性レンサ球菌感染症（STSS）届出の動向
2022年1月1日～2026年3月31日（2026年4月10日現在）

国立健康危機管理研究機構 国立感染症研究所 応用疫学研究センター
感染症サーベイランス研究部

劇症型溶血性レンサ球菌感染症（streptococcal toxic shock syndrome : STSS）は、病状の進行が急激かつ劇的で、発病から数十時間以内にショック症状、多臓器不全、急性呼吸窮迫症候群、壊死性筋膜炎などを伴う、致命率の高い感染症である。

本疾患は、感染症法に基づく5類全数把握疾患として、診断したすべての医師に届出が義務付けられている。1999年4月～2006年3月までの期間においては、原因菌はA群溶血性レンサ球菌に限定しての届出とされてきたが、2006年4月から、A群に限らずヒツジ赤血球加血液寒天培地において β 溶血（完全溶血）を示すレンサ球菌すべてが届出対象に変更された。

ヒトに化膿性疾患を起こすレンサ球菌の多くは β 溶血性レンサ球菌であり、細胞壁多糖体抗原性による分類（Lancefield分類）では、A群レンサ球菌〔Group A *Streptococcus* (GAS); 主に *Streptococcus pyogenes*〕、B群レンサ球菌〔Group B *Streptococcus* (GBS); 主に *S. agalactiae*〕、C群またはG群レンサ球菌〔Group C or G *Streptococcus* (GCS または GGS); 主に *S. dysgalactiae subsp. equisimilis* (SDSE)〕の3種が重要である。

GASは、①急性咽頭炎や蜂窩織炎などの急性化膿性疾患や敗血症、②毒素に起因する猩紅熱やSTSS、③免疫学的機序が関与する急性糸球体腎炎やリウマチ等の続発症を引き起こす。GBSは、新生児の菌血症、髄膜炎、および成人の敗血症、肺炎等の原因となり、SDSEは、呼吸器感染症、敗血症、STSSを引き起こす。

感染症発生動向調査において、2022年1月1日～2026年3月31日に診断された5,343例が届出られた（2026年4月10日現在）。

血清群別（Lancefield分類による）届出数（性別）では、A群2,478例（男性1,410例、女性1,068例）、B群850例（男性462例、女性388例）、G群1,623例（男性887例、女性736例）であった。なお、Lancefield分類が不明、その他、届出数の少ないC群（男性44例、女性25例）または複数の血清群として届出された392例は血清群別集計から除外した。

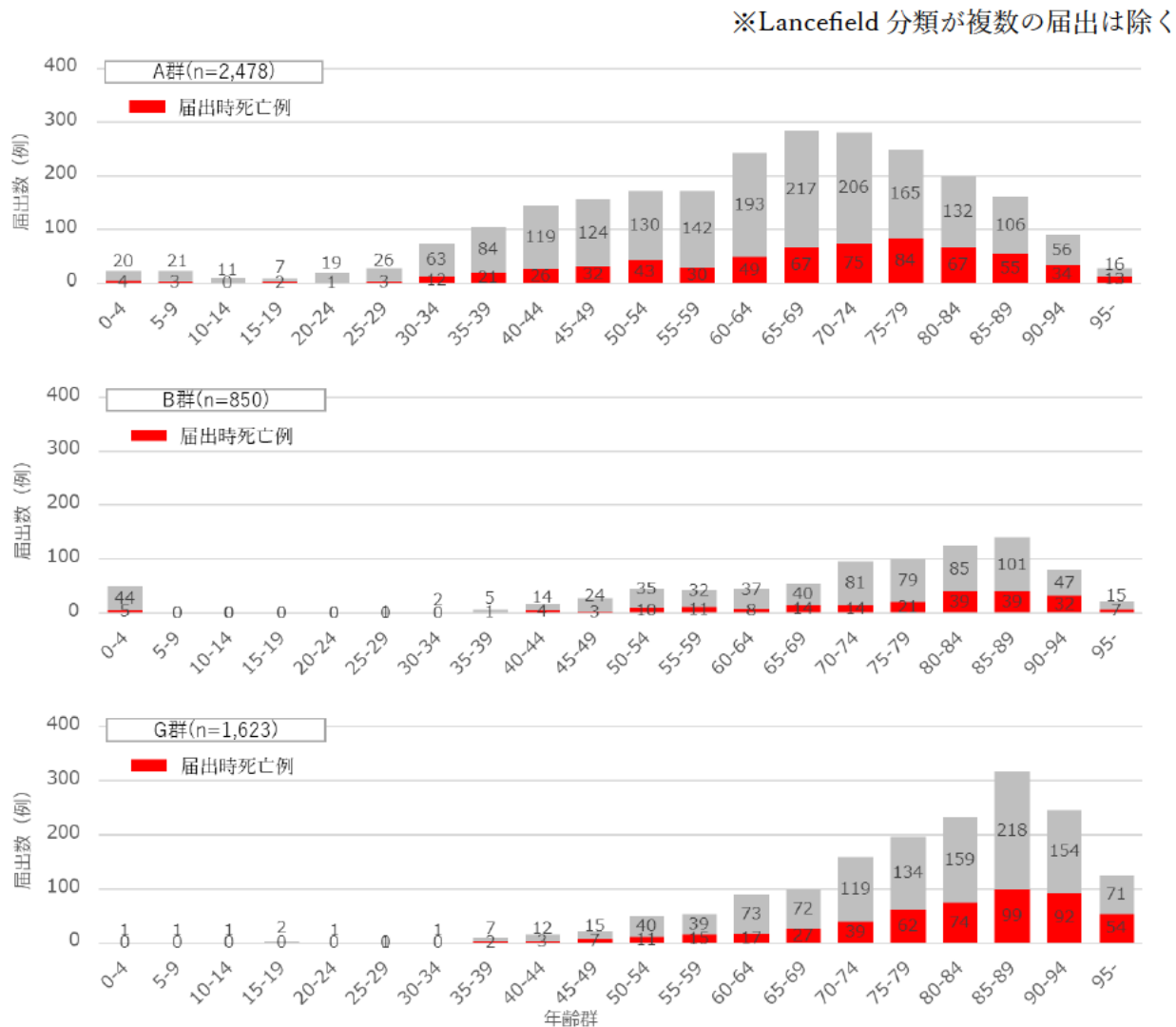
届出時点の年齢中央値（四分位範囲）は、A群65(50-76)歳、B群76(62-85)歳、G群82(72-89)歳であった。

感染症発生動向調査における届出状況や患者情報の変化について、今後も注視を継続する。

劇症型溶血性レンサ球菌感染症（STSS）届出の動向

2026年5月14日更新版

図3. Lancefield分類別（A群、B群、G群）年齢群別 劇症型溶血性レンサ球菌感染症（STSS）届出数（n=4,951 診断日:2022/1/1 - 2026/3/31（2026/4/10現在））



劇症型溶血性レンサ球菌感染症（STSS）届出の動向

2026年5月14日更新版

図4. Lancefield 分類別（A 群、B 群、G 群）劇症型溶血性レンサ球菌感染症（STSS）の届出に必要な臨床症状の割合（ショック症状を除く）（n=4,951 診断日:2022/1/1 - 2026/3/31（2026/4/10 現在））

※Lancefield 分類が複数の届出は除く
 ※臨床症状は複数回答あり

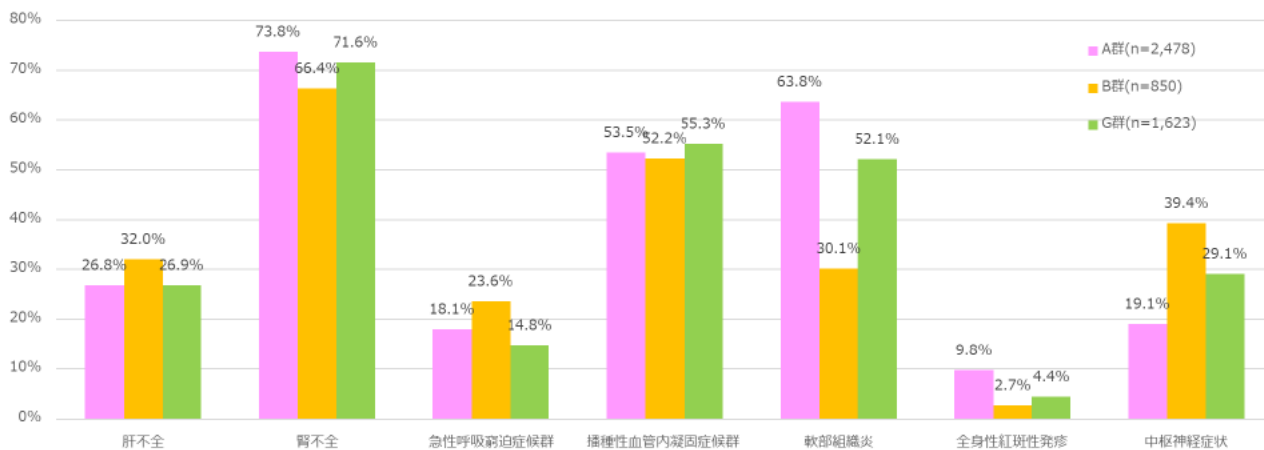


図5. Lancefield 分類別（A 群、B 群、G 群）感染経路別 劇症型溶血性レンサ球菌感染症（STSS）届出数（n=4,951 診断日:2022/1/1 - 2026/3/31（2026/4/10 現在））

※Lancefield 分類が複数の届出は除く
 ※感染経路は複数回答あり

